

まえがき

民具の名称に関する基礎的研究

——民具資料の文化資源化——

研究代表者 神野 善治

はじめに

5年間にわたる「民具の名称に関する基礎的研究」プロジェクトでは、その活動報告と成果物として、昨年度に『国際常民文化研究叢書 6 一民具の名称に関する基礎的研究— [民具名一覧編]』（以下「前編」）を刊行しました。これに続けて、今回は最終年度にあたり、『国際常民文化研究叢書 9 一民具の名称に関する基礎的研究— [地域呼称一覧編]』（以下「後編」）をお届けします。この前後2編は、一体のものとして編集したのですが、ここに提示できた民具の項目数合計が3,000件を超えるものとなり、分冊にせざるを得ませんでした。それがこの後編の「資料編」です。前編で表明した「民具名一覧」のための基礎資料として各地の民具名の「地域呼称一覧」を作成しました。本プロジェクトの主旨と方法は、前編に記しましたが、後編のみを手にする読者のために、若干重複することを含めて、後編の解説をしておきたいと思います。

「民具の地域呼称一覧」について

後編では、日本各地から9つの地域の民具コレクションを選んで、そこに収集された具体的なデータから、地域ごとに基本的な民具を抽出する作業を行いました。なぜ、このような方法をとったかは、前編にも示したとおりですが、対象としたコレクションは、本プロジェクトのメンバーが、その収集調査の初期の段階から長年にわたり関わってきたものが中心となっています。

福島県の会津只見、静岡県沼津、岐阜県の徳山、神奈川県川崎、滋賀県、鹿児島県、沖縄県の民具コレクションです。しかし、全国を見渡すと、これだけではあまりにも限られた地域のものであり、地方的にも欠けているので、これに新潟県の奥三面と東京都羽村の民具コレクションを加えることとしました。各地域の解説文にも記したとおり、この二つのコレクションは、収集されている民具の分野が上記のコレクション群と関連し、収集規模が比較的小さいため、本プロジェクトの期間にスタッフによる検討が可能だと思われたこと、そして何よりもデータの掲載を所蔵者より許可いただけたことが採用の理由です。また、今後の展開のため海外の事例についても、プロジェクトのスタッフ関わったイランと韓国の民具について検討を加えました。

民具の「標準名」と「検索タグ」

民具の研究が学問的に意識されはじめたのは、昭和初期から第二次大戦前にかけてのころで、渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムの活動がその中心であったことはよく知られています。そのころ渋沢とそのメンバーたちは、研究対象を見定めるために、民具にも生物学で言うような

「種」を特定して、それぞれにいわば「学名」に相当する「標準名」を付ける必要があると真剣に考えていました（『アチックマンスリー』第21号 アチックミュージアム（1937年2月）21号の磯貝勇論文、31・32号（1938年1・2月）の結城次郎論文など）。そこには民具研究を科学的な学問として確立させたいという強い意欲が感じられます。

しかし、学名として「標準名」を設定するという事は、ある同一種の民具をひとつにまとめた概念を「種」として設定して、それに名前を与えることになるわけです。そのこと自体が、民具のように人間が生み出した造形物の世界でも可能なのか。改めて、生物学が提示した「種」の概念を確認してみると、それが成り立たないことを認めざるをえません。というのは、生物の場合には、「共通する形態的特徴を持ち、他の集団との間には不連続性が見られる」「種間の交配の不能」ということが「種」の存立条件だといわれますが、民具の場合には、「お互いに交配しない」「不連続の関係」という条件を厳密に適用することができません。厳密に考えれば考えるほど、「民具」として生物学が言うような「種」を特定することはできないと悟られます。民具のような分野は、隣のジャンルとの間が極めて曖昧で、明確に境界線を引くことができないことが多いのです。例えば、民具でも比較のおおきな区分である「籠と笊」、「皿と鉢」、「甕と壺」などの名前をあげると、一般的にはそれぞれのイメージを浮かべることができても、その中間的な存在を考えると、どちらに属するのか境目は明確ではありません。「箱と袋」のように明確に違うように思えるモノでも、「薄手のやわらかい紙箱」と、「厚手の紙袋」とは、ほとんど差がありません。このような曖昧な概念でしかとらえられないとしても、民具研究の対象をなんらかの方法で特定しない限り、科学的な学問としては展開できません。そのようなことが可能なのか。どうしてもその可能性を探らなければなりません。そのために今回のプロジェクトでは、民具の「種」を見出して「標準名」を定めるというのではなくて、共通の集団と考えられる民具を比較検討するための手がかりとして分野ごとに基本的な民具を見出し、「検索タグ」としての名称を用意できればということを確認して作業にあたりました。

基本的民具と典型

私たちは、日本人であれば、（あるいは「ある年齢以上の人なら」と言わなければならないかもしれませんが）、身の回りの基本的な品物ならば、「釜」と「鍋」とか、「犁」と「鋤」などを区別したり、「茶碗」といえば、「飯茶碗」や「湯呑茶碗」をほぼ共通のイメージで思い描くことができると普通は考えられます。厳密に言えば、たしかに「器」の仲間でも、互いの境目は明確ではなくて、どちらともいえる品物が存在し、御飯を食べる器なのに「お茶碗」といったりして、名称が入れ違っていたりすることもあります。何らかの方法で、日本語として基礎的な物品の名称が共通に意識されていることを確認できるのではないのでしょうか。「箱と袋」も厳密には境目は曖昧であっても、典型的な特徴をとらえて把握するという認識の方法があるのではないのでしょうか。

「前編」では、認知科学とか認知言語学という学問分野で「色の名前」について研究が展開されてきたことを紹介しました。「色」は、本来は境目の無い対象の特定の範囲を区切って名前を付けてきたもので、言語や民族が異なる人たちは、それぞれ別の基準で色に恣意的に名前を付けて呼び分けてきたのだという意見がありました。ところが研究が進み、さまざまな実験が繰り返されて、実は人類は、いくつかの「焦点色」というものを識別する能力を生まれながらに持っていることがわかってきた。それぞれの言語が持つ基本色の名称が示す範囲の境界線は微妙に違って、その中に人類に共通する限られた典型的な「焦点色」が含まれているのだという調査結果がでてくるというのです。

このことをヒントに、民具のような造形物の場合には、生物の「種概念」のように厳格に範囲を境界線で区切る方法ではなくて、概念の核（あるいは「焦点」）になるような形態と機能の「典型」が共通に意識されていて、その周辺に広がる概念になっているのではないかと考えてみました。これは筆者の夢想する仮説で証明することは容易ではありませんが、民具の具体例の中から抽出していくことの可能性を考えてみることにしました。

既存の民具コレクションの活用

「民具の名称に関する基礎的研究」と題してスタートしましたが、とくに民具の名称の基礎的な捉え方については、「認知言語学」などが到達している成果を咀嚼しようと努めてみたものの、考えれば考えるほど、泥沼にはまって前にすすめません。しかし、具体的な民具に出会って、その形態や機能を探り、実際の暮らしのあり方と重ね合わせることで、魅力的なテーマや、小さな発見をして感動することがしばしばあります。そのような民具の魅力を引き出し、現代の社会に提示できるかがとても大切なことだと思います。そこで、抽象的に頭の中だけで考えるだけでなく、実際に日本各地で使われてきた民具のあり方を具体的に明らかにすることにエネルギーを使い、混沌とした世界と正面から格闘しつつも、民具のあり方（形態や素材や機能と名称の関係など）の本質的なところを帰納的に明らかにしていく方法をとるのが賢明なのではないかと考えました。

まず、日本の地域ごとの暮らしを、それぞれの分野ごとに支えてきた「基本的な民具」にどんなものがあるのか。それらは「種概念」では捕えられないとしても、それらの「典型的」といえる形態や機能を特定して、それが地域的にどのように呼ばれているかをたどることができるだろう。そうした情報を、全国的に組織的に体系的に収集しようとするならば、極めて大がかりな、それこそ国家的な大プロジェクトを組まなければ実現できないでしょう。そこで今、私たちにできる方法として思い至ったのが、すでに全国各地に蓄積されている博物館の収蔵資料と、特にすぐれた民具のコレクションとして、収集整理が実現している国の重要有形民俗文化財に指定されたコレクション群の存在でした。地域の暮らしと日本の民俗文化を特徴づける民具コレクションが、これほど全国に蓄積されている国は、おそらく世界でも日本以外にはないと思われます。これを活用しない手はありません。

しかし、残念ながら資料カードの類はあっても、今の情報化社会でも、このような分野はなかなかデータベース化されておらず、その全データがネットなどで情報公開されている例はまれです。

幸い、今回のプロジェクトでは、日本の各地で民具研究に取り組み、大きなコレクション、しかも国の重要民俗文化財の指定を得ることに大きな力を尽くしたメンバーが何人も集結していました。それぞれの信頼関係の中から、コレクションの全リスト、民具の個別のデータをプロジェクトに提供いただくことができたものがあり、これを対象に地域ごと（コレクションごと）にそれぞれの分野を特徴づける民具のリストを抽出する作業が実施できたのです。

これらのコレクションは、その収集意図が明確で、個別の資料についての情報が整備されており、しかも実物資料を改めて確認することが可能です。それぞれの担当メンバーが、基本的な民具と考えられる民具の分類単位を抽出するとともに、プロジェクトメンバーがそろって見学に出向き、研究会では、項目の選び方や、項目の捉え方、それに与えられる名称、そしていかにしたら、他の地域と同類を比較することができるかなどについて検討を加える作業を繰り返しました。

この「地域呼称一覧」をつくる作業は、広域を対象にしたコレクションの場合などには、それぞれの地域の「民具名彙」あるいは「民具事典」を編纂するのに相当する大作業になりました。ここにそのような労作が提示されています。そこに地域を特徴づける典型的な民具が適切に抽出できて

いるとしたら、それは、それぞれを担当した編者の見識によるところが大きいわけですが、元資料にした民具のコレクション自体が、周到な準備のもとに長期間にわたって蓄積された地域の民具の集大成であり、すでに高い評価を得ているものであったからだともいえるでしょう。

日本の民具の「分野別・場面別分類」

最後に今回検討対象とした、地域のコレクションの分類方法についてすこし触れておきたいと思っています。これらは、いずれも、かつて渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムが「民具蒐集の手引き」として提示した民具の分類を踏襲し、その後、文化庁が採用した民俗文化財の分類に準じています。生活の分野ごとに、生活の場面ごとに分野したものです。いわば「分野別・場面別分類」といえるでしょう。

まず、主に家の中で用いられる「衣・食・住」の分野の民具が、続いて「生産・生業」の場で使われてきた農耕具や漁撈用具や山樵・狩猟といった山仕事の道具など、地域ごとの自然や社会の環境の中で使われてきた民具をいわばセットとして捉えた分類になっています。

共通する要素を持った民具コレクションが各地にあり、これらを重ねて集中的に分析することで、日本の生活文化のあり方を具体的に示す基本的な民具が、あらゆる分野で自ずと抽出されてくることになるでしょう。そこには自然環境の違いや、歴史的な経緯などの記憶も残されている可能性もあります。民具のあり方とおして、これまで文献資料や物質文化でも工芸美術などに限られていた日本文化の理解が総合的に展開する道が開けることが期待されます。

地域呼称を加筆した「民具名一覧」（「全国・民具名称対応表」）

本報告書の最後には、「前編」で表明した全国の「民具名一覧」に、上記のコレクションなどから抽出した地域ごとの覧を加え、代表的な地域呼称を書き入れる作業を行いました。「地域呼称一覧」には、社会生活や信仰・年中行事などの分野の民具も取り上げられているものもありますが、今回の「民具名一覧」では、作業時間とスペースの制約から、主に、衣・食・住と、農耕・漁撈など生業の各分野に限って掲載しています。

プロジェクトの当所は、「地域呼称一覧」を抽出する作業の成果を、全国の「民具名一覧」に反映させる展開を考えましたが、二つの作業は、同時並行で進めざるを得ず、結局「地域呼称一覧」の整備が最終年度の終わりまでかかったことから、結果的には、相互に補完させていく作業を徹底的にできなかったことを告白しなければなりません。

つまり、「地域呼称一覧」も全国版の「民具名一覧」も、いずれも多くの課題をかかえたままの試作品として提示せざるを得ませんでした。その問題点を克服して、今後の展開につなげたいと考えています。その展望は「あとがき」に表明しておきます。

共同研究者・研究協力者一覧

共同研究職分	氏名	所属機関	専 門	所属期間
2. 民具資料の文化資源化				
2-1 民具の名称に関する基礎的研究				
代表者	神野 善治	武蔵野美術大学	民俗学・博物館学	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
副代表者	佐野 賢治	神奈川大学	民俗学	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
共同研究者	上江洲 均		民俗学、民具学	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
共同研究者	川野 和昭	南方民俗文化研究所	日本民俗学	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
共同研究者	河野 通明	神奈川大学	民具からの歴史学・ 四季耕作図史	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
共同研究者	高 光 敏	国立木浦大 schools	民俗学・民具学	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
共同研究者	後 藤 晃	神奈川大学	農業経済学、イラン・ トルコ経済史	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
共同研究者	佐々木長生	福島県立博物館	民俗学	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
共同研究者	真島 俊一	TEM 研究所	生活学・民具学・ 建築学・道具学	2009. 8. 4 ~ 2013. 5. 25
共同研究者	八重樫純樹		応用情報学	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
国内研究協力者	石野 律子	武蔵野美術大学	民具学・道具学	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
国内研究協力者	新国 勇		植物生態学、鳥類学	2009. 8. 4 ~ 2015. 3. 31
国内研究協力者	市田 京子	日本はきもの博物館	はきもの研究	2010. 6. 20 ~ 2011. 3. 31
国内研究協力者	高橋 典子	川崎市市民ミュージアム	日本民俗学	2010. 6. 20 ~ 2015. 3. 31
国内研究協力者	佐藤 裕子	元沼津市歴史民俗資料館	民具学	2011. 4. 23 ~ 2013. 5. 25
国外研究協力者	金 宗 奎	韓国国立民俗博物館	建築学	2011. 4. 23 ~ 2015. 3. 31

共同研究職分	氏名	所属機関	専門	所属期間
国内研究協力者	辻川 智代	滋賀県立琵琶湖博物館	民俗学	2012.6.22 ~ 2015.3.31

共同研究職分	氏名
執筆協力者	脇田 雅彦
執筆協力者	脇田 節子
執筆協力者	関 悦子

共同研究職分	氏名	年月日
業務協力者	因 琢哉	2011.1.21 ~ 2011.3.31
業務協力者	神野 知恵	2011.9.12 ~ 2011.10.31
業務協力者	斎藤 玲児	2013.5.1 ~ 2014.3.31
業務協力者	長井 亜弓	2010.1.12 ~ 2014.3.31
業務協力者	馬渡 なほ	2009.10.1 ~ 2013.3.31
業務協力者	三村 宜敬	2009.10.1 ~ 2011.3.31

※所属機関は 2014 年 4 月 1 日時点